慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マス・メディアをめぐるエスニック紛争 : 戦間期アイルランドにおけるラジオ放送の意味
Sub Title	
Author	津田, 正太郎(Tsuda, Shotaro)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2004
Jtitle	メディア・コミュニケーション : 慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.54 (2004. 3) ,p.137- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20040300-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

マス・メディアをめぐるエスニック紛争

――戦間期アイルランドにおけるラジオ放送の意味――

津田正太郎

▶1　はじめに

国民統合においてマス・メディアが重要な役割を果たしうることは，これまで数多くの研究者によって指摘されてきた。マス・メディアは，見ず知らずの「同胞」を想像することを可能にし，他の国民共同体（nation）と自分たちとの「差異」を認識させることでナショナル・アイデンティティの形成を促進する(1)。さらに，国民の間に共通の知識や記憶を流布することで成員同士の相互理解を高め，「国民文化」と呼称しうるものを形成していくのである。

しかし，このような国民統合が常に順調に進むわけではないこともまた多数の研究者によって論じられてきた。すなわち，国民統合を主導する上流・中産階級に対して労働者階級の抵抗が行われたり，中央から押しつけられる「国民文化」に対して地方からの反発が生じたりすることが想定されうる。後者の場合，中央からの文化の流入を促進するマス・メディアに対しても批判が行われ，地域の文化的アイデンティティの維持に貢献しうるメディアの必要性が訴えられることになる。

だが，問題がさらに複雑になるのは，地域の内部において対立が存在する場合である。つまり，同一地域内に複数のエスニック集団が存在し，互いに異なる文化的アイデンティティを追求している事態などが考えられる。本論で取りあげる戦間期の北アイルランドの場合，同地域とアイルランド自由国（当時）との統一を主張するナショナリストと，同地域がイギリスの一部であることを訴えるユニオニストが，それぞれに異なる文化のあり方を主張していた(2)。従って，マス・メディアに対しても，それぞれの党派からしばしば相矛盾する要求が行われることになったのである。

このような場合，マス・メディアには２つのあり方が想定されうる。１つはある党派への支持を明確にすることである。たとえば，戦間期北アイルランドの朝刊紙では，『アイリッシュ・ニューズ（Irish News）』がナショナリストの側に立ち，『ベルファスト・ニューズレター（Belfast News-Letter）』と『ノーザン・ウィッグ（Northern Whig）』とがユニオニストを支持していた。そして，もう１つのあり方がそうした党派間の争いから可能な限り距離を追こうとするものである。本論で注目するBBC北アイルランド局(3)はまさしくこの方針のもとで設立された。だが，後述するように，同局は北アイルランドで政治的・社会的に支配的な立場にあったユニオニストの側へと徐々に傾斜していく

ことになる。すなわち，同局は中立的な立場を維持しえず，完全にそうだったとは言えないにせよ党派的なメディアへと変貌を遂げていったのである。

従って，そこから想定されるのは，ナショナリスト側によるBBCの放送に対する批判と，ユニオニスト側による擁護という図式であろう。ところが実際には，ナショナリスト側はBBCに対して好意的な態度を示す傾向にあり，しかも自分たちが独立を望んでいるはずのイギリス本土のBBC本部（head office）による北アイルランド局への介入を歓迎していた。他方，ユニオニスト側は自分たちに好意的であるはずの北アイルランド局の放送に対して厳しい批判を行うことが多かった。

こうした状況を理解するにあたっては，中央と地域との対立といった図式は言うまでもなく，地域内でのエスニック集団間の対立といった図式ですら不十分である。ここで必要とされるのは，国家の対外的な関係（アイルランド自由国との関係）や，エスニック集団内における対立（特にユニオニスト内部での対立）をも視野に収めた図式である。すなわち，それらの様々な力学が働いた結果として，上述したような「ねじれ」が発生することとなったのである。

本論の目的は，そのような観点に基づいてBBC北アイルランド局を取り巻く状況を分析し，「ねじれ」の発生した原因を解明することにある。それにあたって，まずは本論の位置づけを明らかするために既存研究の整理を行う。次に，アイルランド自由国における放送政策と北アイルランドの社会的状況について論じ，北アイルランド局が置かれていた政治的・社会的文脈を明らかにすることを試みる。そしてそこから，同局がBBC本部や北アイルランド自治政府といかなる関係にあったのかを検討し，その放送に対するナショナリストやユニオニストの反応について述べる。そうすることで，北アイルランド局が直面していた様々なジレンマを描き出し，上述の「ねじれ」の要因を解き明かすことが可能になると考えるからである。

▶2　BBCとエスニック紛争に関する研究系譜

イギリスの国民統合におけるBBCの役割に関しては，日本でもいくつかの研究が蓄積されてきた(4)。しかし，それらの研究は国民統合におけるBBCの影響力を強調することで，統合が成功したとは言い難い北アイルランドのような事例を見落とす形になっているのが現状である。他方，イギリスおよびアイルランドでは，北アイルランドにおけるラジオ放送についての既存研究がかなり蓄積されている。なかでも，最も重要な研究として位置づけられるのがレックス・カスカート（Rex Cathcart）による『最も矛盾した地域（The Most Contrary Region）』（1984）であろう。この著作のなかでカスカートは，膨大な資料に基づいてBBC北アイルランド局が抱えていた様々なジレンマを明らかにしている。また，より近年の研究では，マーティン・マクルーン（Martin McLoone）やマイリード・クライス（Máiréad Craith）らがエスニック・アイデンティティ論の観点から北アイルランドにおける放送の問題を論じている（McLoone 1991, 1996; Craith 2003）。本論では，これらの研究に依拠すると同時に，BBCの政策文書や当時の新聞の分析を通じて「ねじれ」の問題の解明を試みたい。

また，より全般的な北アイルランド紛争を扱った研究では，近年，エスニック集団内での多様性に注目を払うアプローチが盛んに採用されている。すなわち，エスニック集団を「本質的な」属性と見なすのではなく，人びとを区分するカテゴリーそのものが有する暴力性に注意しながらエスニック集団内での対立や矛盾に焦点を当てる研究である。たとえば，マイケル・イグナティエフの次の言葉は，そのような問題意識を的確に表し

ている（Ignatieff 1993=1996: 307）。

「（北アイルランドでは：引用者）生まれてこのかたただの１度も教会に行ったことのない者が，プロテスタントのラベルを張られて生きねばならない。かたや，南北アイルランドの統一など望んでもいないのにたまたまカトリックに生まれた者が，カトリックというだけで『ナショナリスト』のレッテルを張られてしまう。」

本論においても，このような視点に基づき，特にユニオニスト内部の対立に注目しながら議論を進めていくことにしたい[5]。そうすることで，ユニオニストの側からBBCに対して多くの批判が寄せられることとなった理由が明確になると考えるからである。

最後に，エスニック紛争と文化との関係についての研究について述べておくと，エスニック集団を本質的なものと考えるアプローチでは，その集団の核となる価値や規範を指す概念として文化が用いられることが多い。しかし，エスニック集団についての本質主義的な発想を拒否することは，必然的に文化の概念についても再考を促すことになる。すなわち，エスニック集団への帰属が「本質的な」ものでないとするなら，特定のエスニック集団に固有かつ不変の文化の存在を想定することが極めて困難になるのである。フレドリック・バルト（Fredrik Barth）やウォーカー・コナー（Walker Connor）らは，他の集団から自分たちを差異化することを目的としてエスニック集団がレトリック的に「文化」を語りうることを早くから指摘してきた（Barth 1969: 35; Connor 1972: 337）。従って，近年のエスニック集団の「本質主義」を批判する動きは，バルトらのアプローチをより明確に打ち出すこととなったと言えよう。本論で扱う放送や文化的アイデンティティに関する論議も，基本的には同様の観点から検討していくことになる。ただし，そのような文化をめぐる言説は，エスニック集団内で共有される価値や規範などに再帰的に影響を及ぼしうるのであり，単なる表層のイデオロギーとして処理しえないことにも注意する必要があるだろう。

▶３　BBC北アイルランドをめぐる状況[6]

（1）アイルランド自由国の独立と放送

1922年，アイルランドでは長きにわたるイギリスの支配が終焉し，アイルランド自由国が成立することとなった。しかし，周知のようにプロテスタントが住民の多数を占めるアルスター地方の６県には異なる自治政府が設置され，南北アイルランドの分割が始まることになる[7]。アイルランド自由国では，この分割を容認するか否かをめぐる対立が内戦にまで発展し，1923年に分離容認派の勝利で終わるまで続くこととなった。しかし，分離反対派のエーモン・デ・ヴァレラ（Éamon de Valera）が率いるフィアナ・フォイル党（Fianna Fáil）は，1932年の選挙で政権を獲得し，イギリス政府との対決姿勢を強めていくことになる。そして，1937年には国家元首たる大統領を有する主権国家としてエール（Éire）と改称，1949年にはイギリス連邦をも脱退することになるのである。

このような過程を経てアイルランド自由国が独立を成し遂げた当初，その独立のシンボルの１つとなったのがラジオ放送局であった。言わば，当時のラジオ放送局は，1960年代に独立を遂げた新興国にとっての航空会社と同じ位置づけを有していたのである（Horgan 2001: 14）。加えて，1924年にBBCが北アイルランドに放送局を開設していたことも，自由国政府に放送局の設立が急務だとの感覚を与えた（McLoone 1996: 23）。そのため，北アイルランドの分離容認をめぐる内戦が終結してからわずか３年足らずのうち

関連年表

1914年	第３次アイルランド自治法成立。 第１次世界大戦勃発。
1916年	イースター蜂起。
1918年	第１次世界大戦終結。
1919年	アイルランド独立戦争勃発。
1921年	アイルランド統治法成立。 アイルランド独立戦争終結。
1922年	アイルランド自由国成立。 アイルランド内戦勃発。 BBC（British Broadcasting Company）設立。
1923年	アイルランド内戦終結。
1924年	BBCベルファスト局開局。
1926年	アイルランド自由国で初の放送局（２RN）が開局。 ジェラルド・ビードルがベルファスト局ディレクターに就任。
1927年	BBCが公共放送（British Broadcasting Corporation）へと改編。
1932年	アイルランド自由国選挙にてフィアナ・フォイル党が政権を獲得。 エーモン・デ・ヴァレラが首相に就任。 ジョージ・マーシャルがベルファスト局ディレクターに就任。
1933年	ラジオ・アスロン開局。
1934年	ベルファスト局が正式の地域局（北アイルランド局）へと再編。
1935年	ベルファストにおいて暴動発生。
1937年	アイルランド憲法が制定され，アイルランド自由国からエールへと改称。
1949年	エールにおいて共和制が宣言され，イギリス連邦より離脱。

Figure & Table

に，アイルランドの国営放送局はダブリンで放送を開始することとなった。そのコールサインから２RNと呼ばれたこの放送局の開局においては，後にアイルランド共和国大統領となるダグラス・ハイド（Douglas Hyde）が演説を行っている。ハイドはその演説のなかで，２RNの開局によってアイルランド自由国が他の諸国と肩を並べることになったと述べ，また，ラジオ放送によって共通の言語，音楽，慣習等を有する国民の形成が可能になると訴えている（Gorham 1967: 24）。ここに，ラジオ放送に対する当時の期待の高さを見ることが出来よう。

２RNの開局に続いて，1927年にはコークにも放送局が設置され，1933年には大出力の放送局であるラジオ・アスロン（Radio Athlone）が放送を開始している。ラジオ・アスロンの開局に際して，前年に首相に就任したばかりのデ・ヴァレラは次のような演説を行った。それは，「侵略者たちの子孫」に対するアイルランド人の戦いは継続中であると宣言し，ラジオ・アスロンを「本国のアイルランド人とディアスポラのアイルランド人との架け橋」と位置づけるものであった（Northern Whig 1933/2/8; Pine 2002: 178）。すなわち，独立や国民形成のみならず，アイルランドの南北統一の手段としてもラジオ放送は考えられるようになったのである。

もっとも，これらのハイドやデ・ヴァレラの言葉にもかかわらず，アイルランド自由国政府の放送局に対する熱意はそれほど長続きしなかった。そのため，開局した当初の２RNやラジオ・アスロンは極度の予算不足に苛まれることになる（Gorham 1967: 27）。さらに，実際の番組制作においても，国民形成という目標が必ずしも明確に意図されていたわけではなかった（Pine 2002: 172）。その背景にあった要因としては，フィアナ・フォイル党がラジオ放送に対して根深い猜疑心を有していたことに加えて（ibid.: 64），アイルランド自由国の独立が確固たるものとなるにつれ，独立のシンボルとしての放送の重要性が希薄になっていったということが指摘されよう。

しかし，それとは対照的に，北アイルランドにおいて放送は重要な政治的・文化的な資源と見なされ続けた。その背景を理解するため，以下では分割後の北アイルランドの社会情勢について見ていくことにしよう。

（2）戦間期北アイルランドの社会情勢

前節で述べたように，アルスター地方の６県にはアイルランド自由国とは別に自治政府が設けられることとなった。この自治政府の統治下においてはプロテスタントが政治的・社会的地位において優位に立ち，カトリックに対しては様々な差別が行われていた。そのため，南北アイルランドの統一を望むカトリックの声はより一層強まっていくことになる。

他方，プロテスタント主導で自治政府が設立されたにもかかわらず，プロテスタントはイギリス本土から見捨てられるのではないかという恒常的な不安に苛まされることとなった。実際，政治情勢の変化次第では，イギリス政府がアイルランドの南北統一を認める可能性は少なからず存在していた[8]。また，宗教的共通性という北アイルランドとイギリス本土との紐帯も，イギリス本土で世俗化が進行するにつれて弱体化していく傾向にあった。そのため，両地域を結ぶ新たな紐帯が捜し求められていたのであり，後に見るように北アイルランド局を包含するBBCのネットワークもそうした紐帯の一部と見なされるようになるのである。

しかし，ここで留意すべきは，北アイルランドの紛争をプロテスタントとカトリックとの宗教的対立という観点からだけでは理解することができないという点である。既に論じたように，全てのカトリックが南北アイルランドの統一を望むナショナリストであったわけではなく，全てのプロテスタントがそれに反対するユニオニストだったわけでもない。ユニオニスト側について言えば，イギリス本土との一体性を強調する「ブリティッシュ・ユニオニスト」と，アルスターの独自性を強調する「アルスター・ユニオニスト」との対立などが見られた[9]（Craith 2002: 16）。そして，このような立場の相違は，BBC北アイルランド局に対して矛盾した要求が行われる背景となるのである。

とはいえ，そのような内部での対立にもかかわらず，ユニオニストを団結させうる共通の要素があったとすれば，それはアイルランド自由国に対する敵意であった。逆に言えば，そのような対立が存在したからこそ，共通の「敵」が必要とされたとも言えるだろう。実際，アイルランド自由国に取り残されたプロテスタントは悲惨な境遇にあるとの報道が継続的になされ（Horgan 2001: 24），同国による南北アイルランド統一とそれを支持するナショナリストの脅威が喧伝され続けたのである。

そして，そのようなアイルランド自由国に対する敵意は，徐々に文化的な領域にまで及んでいくことになる。すなわち，自由国との分割を固定化させようとする試みが，同国と北アイルランドとの文化的差異の強調へと繋がっていくことになるのである（McLoone 1996: 26）。特に，分割反対派のフィアナ・フォイル党が自由国で政権を獲得し，また，高出力のラジオ・アスロンの放送が北アイルランドにまで届くようになると（Horgan 2001: 26），ユニオニストのそうした衝動はより一層強まることになる。事実，ラジオ・アスロンの開局に際してデ・ヴァレラが行ったような演説の放送は，自由国に対するユニオニストの敵意を掻き立てることとなった（Northern Whig 1933/2/8）。

そして，このような状況を背景として，ユニオニストによるBBC北アイルランド局に対する要求も厳しさを増していく。後述するように，北アイルランド局の番組が北アイルランドをより「適切に」表象することが求められるようになる一方，同局がアイルランド自由国の俳優を起用したり，ラジオ・アスロンと共同番組を制作することに対しては激しい批判が行われるようになる。

以上のように，本章ではBBC北アイルランド局が置かれることとなった政治的・社会的文脈を概観してきた。次章では，同局の放送政策とそれに対する聴取者の反応をより具体的に見ていくことにしよう。

▶4　BBC北アイルランド局のジレンマ

（1）BBC北アイルランド局の設立

1924年９月15日，BBCベルファスト局は放送を開始した。開局時のベルファスト局には，オーケストラを含めてもスタッフが30人ほどしかいなかったという（Cathcart 1984: 1）。しかし，その後には順調に規模を拡大していき，1934年には組織再編によって正式の地域局である北アイルランド局へと昇格している。とはいえ，その発展の過程においては様々な問題が発生し，ロンドンのBBC本部ともしばしば衝突を生じさせることになった。1926年にベルファスト局のディレクターに就任したジェラルド・ビードル（Gerald Beadle）の回想によれば，６年間の在任期間中，摩擦の解消のためにしばしばBBC本部を訪問することとなり，合計で150回もアイルランド海を横断したのだという（Beadle 1963: 24）。

ここでは，そのような摩擦が発生した原因として次の２点を挙げておきたい。第１点目は北アイルランド局が北アイルランド自治政府と過度に接近する傾向にあったことであり，第２点目はBBC本部と北アイルランド局との間に「北アイルランド観」の相違が存在したことである。まず第１点目について言えば，北アイルランド局は自治政府と密接な関係にあり，そのことがBBC本部に警戒感を生じさせることになった。北アイルランド局のディレクターは自治政府の首脳陣と密接なコンタクトを有しており，たとえば，先に挙げたビードルも毎日のように社交クラブで自治政府の要人に会っていたと回想している（ibid.: 23）。しかし，BBC本部はこのような両者の接近を必ずしも好意的には捉えていなかった。BBC本部の基本的な姿勢はあらゆる政治的党派から可能な限り自律性を確保することであり，北アイルランド局が自治政府やそれを支配するユニオニストによって取り込まれることは回避されねばならなかった。加えて，当時のBBC本部は集中化（centralisation）政策によって地域局への統制を強化しようと試みていた(10)。そのため，北アイルランド局と自治政府とが過度に接近することは，BBC本部による統制が行き届かなくなる危険性を孕んでいたのである。

このようなBBC本部と北アイルランド局との摩擦は，1927年にビードルとBBC会長のジョン・リース（John Reith）との間で交わされた書簡に明確に反映されている。ビードルはリースに向けた書簡のなかで，ベルファスト局を北アイルランド自治政府の代弁者として位置づけて非常事態の際には自治政府の監督下に入ることを提案した(11)。リースはそれに対し，ベルファスト局が自治政府と友好的な関係を結ぶことには同意するものの，同局の直接的な責任が自治政府ではなく，イギリス政府の郵電省大臣（Postmaster General）に向けられていることを強調した(12)。また，非常事態での自治政府によるベルファスト局の統制に対しては強く反対している。このやりとりに典型的に示されているように，北アイルランド自治政府の意向に従おうとする北アイルランド局を，党派間の紛争に巻き込まれることを嫌うBBC本部が抑制するという構図が存在していたのである。

しかし，1930年代に入ると北アイルランド局はユニオニスト体制に傾斜する姿勢をより明確に示すようになる（Cathcart 1984: 90）。そしてそこから，摩擦の原因の第２点目となるBBC本部と北アイルランド局との「北アイルランド観」の相違が鮮明になってくるのである。まず，前者の「北アイルランド観」について見ると，BBC本部は北アイルランドとアイルランド自由国との差異を重視しておらず，むしろ北アイルランド局を

「アイルランドのBBC」と見なす傾向にあった[13]（Cathcart 1984: 5; Scannell and Cardiff 1987: 165）。そのため，アイルランドに関する番組制作に関しても，BBC本部は「北アイルランドの文化」と「南アイルランドの文化」とを殊更に区別して扱う必要性をそれほど感じていなかったと言えよう。

それに対し，北アイルランド局は北アイルランドとアイルランド自由国との差異化を積極的に試みた。その背景には，既に述べたユニオニストのアイルランド自由国に対する敵意があったと考えられる。特に，ビードルの次にベルファスト局のディレクターに就任したジョージ・マーシャル（George Marshall）は，そうした差異化を図る必要性を強く認識しており，たとえば以下のような発言を行っている（Cathcart 1984: 6）。

> 「今日，アイルランド人といったものは存在しない。存在するのはアイルランド自由国の市民か，イギリスおよび北アイルランド連合王国の市民だけだ。アイルランド人といったものは，分割後に存在しなくなったのだ。」

マーシャルは，聖パトリックデー[14]のようなアイルランドが注目される日の放送に関して殊更に敏感であり，そこでもアイルランド全体ではなく北アイルランドの文化を反映させる必要性を強く訴えていた[15]。たとえば，1938年の聖パトリックデーの放送をめぐって北アイルランド局が行った抗議には，そうしたマーシャルの発想が明確に反映されている。この年の放送では，北アイルランド局とBBCのカナダ支局とが合同で放送を行い，カナダ側はアイルランド出身の作家の手によるドラマを放送した。ところが，その作家がアイルランド南部の出身であり，ドラマで用いられた方言もアイルランド南部のものであったため，北アイルランド局側が厳しく抗議することとなった[16]。また，この年の聖パトリックデーにはBBCスコットランド局や西イングランド局などがアイルランド自由国からコンサートを中継し，同国の国歌を放送したが，これに対してもマーシャルは抗議している[17]。言わば，マーシャルはBBCのあらゆる地域局が放送するアイルランド関連番組に対して目を光らせる立場へと自らを置くようになったのである（Cathcart 1984: 95）。

このように北アイルランド局は，アイルランド自由国と北アイルランドとの差異化を積極的に推進するという点において，ユニオニスト体制に傾斜する姿勢を明確にしていった。ただしそれは，同局がユニオニストの合意のもとで活動を推進できるようになったということを意味しなかった。既に述べたように，ユニオニストは同局の放送に対してナショナリスト側よりも批判的な態度を示す傾向にあったのである。そこで次節では，聴取者の側の反応に視点を移すことで，このような「ねじれ」がどのようにして生じることになったのかを明らかにしていくことにしよう。

（2）BBCに対する期待の「ねじれ」

これまで見てきたように，北アイルランド局は北アイルランド自治政府のユニオニスト体制に組み込まれていく傾向にあった。しかし，それにもかかわらず，ナショナリスト側は同局に対して敵対的だったわけではない。ナショナリスト側の朝刊紙である『アイリッシュ・ニューズ』は可能な限り同局に対して友好的な態度を取り（Cathcart 1984: 45），特にBBC本部の方針に対しては歓迎する方向にあった。その理由として考えられるのは，既に指摘したように，BBC本部が北アイルランドとアイルランド自由国との差異化にこだわらず，北アイルランド局を「アイルランドのBBC」と見なす傾向にあったということである。そのため，BBC本部が考える北アイルランドの文化はナショナリスト側にとって好ましいものとなる傾向にあり，従ってBBC本部の介入も好意的に捉えられ

ることになったのである（McLoone 1996: 32）。むしろ，ナショナリスト側は北アイルランド自治政府による北アイルランド局への干渉を警戒していたのであり，『アイリッシュ・ニューズ』もその社説でBBCの体制を評価し，議会等による放送への政治的介入には反対を表明している（Irish News 1935/7/28）。

他方，ユニオニスト側から北アイルランド局のラジオ放送に様々な批判が寄せられた最大の理由は，ユニオニストの要求がしばしば相矛盾するものであり，同局がそれに応えることができなかったということにある。そのような矛盾が生じた背景の１つには，先に挙げた「ブリティッシュ・ユニオニスト」と「アルスター・ユニオニスト」との見解の相違が存在した。すなわち，前者の観点からは，北アイルランド局がイギリス本土との文化的統合を促進すべきだとの期待が生み出され，後者の観点からは同局が北アイルランド独自の文化を発展させるべきとの主張が行われることになったのである。

しかも，たとえ後者の主張を受け入れるとしても，何をもって北アイルランドの文化と見なしうるのかという難問が生じることになった。言い換えれば，アイルランドの文化は南北の境界線によって明確に区分されるような形では存在していなかったのである。たとえば，1936年に北アイルランドを訪問したBBC地域関係ディレクターのチャールズ・シープマン（Charles Siepmann）は，北アイルランドにおける文化的多様性について論じ，特に都市部と農村部との間には人びとの考え方や性格に著しい差異が存在すると述べている(18)。そして，北アイルランド局が同地域の独自性を強調しようとするならば，産業化・都市化の進んだベルファスト近郊ではなく農村部や山間部に放送のための素材を求めざるをえなかった(19)。しかし，そのような形での同地域の表象は，都市部に暮らす人びとの自己イメージとは合致せず，様々な不満を生じさせることになったと言えよう。

そうした不満が最も顕在化する傾向にあったのが，聖パトリックデーやクリスマスのBBCによる特別放送に対する聴取者の反応であった。先にも触れたように，北アイルランド局はそれらの特別放送において地域色の強いドラマや音楽の放送を行ったが，それらがしばしばユニオニストの強い批判を招くことになったのである。たとえば，1933年の聖パトリックデーにおいては「アイルランド」という番組が放送され，演劇形式で北アイルランドの歴史や現状が紹介された(20)。しかし，この番組は「真の」北アイルランドを表象していないという批判がユニオニスト系の朝刊紙である『ベルファスト・ニューズレター』に寄せられ，その批判の妥当性をめぐって読者の間で論争が生じることになる(21)。それはまさしく，何が「真の」北アイルランドの文化であり，それがいかに表象されるべきかをめぐる論争であったと言える。

また，同じ1933年のクリスマス番組「ここにいない友人」では，北アイルランドを離れて他の地域に暮らす人びとに対して「北アイルランドの典型的な家庭のクリスマス」を伝えるという試みがなされた。ところが，ここで問題となったのが，「典型的な北アイルランドの住人」とされた出演者の話した方言であった。この際にはユニオニスト系の朝刊紙である『ノーザン・ウィッグ』と『ベルファスト・ニューズレター』の投書欄において，方言などは使用せずにキングズ・イングリッシュを用いるべきだとの批判のほか，放送された方言は偽物だ，誇張が過ぎている，ごく少数の人びとによって使われているにすぎないといった批判が行われている(22)。

これらの批判や論争に示されるように，何が北アイルランドの文化あるいは方言であるのかという点について，ユニオニストの間でも合意が存在していなかった。そのため，北アイルランド局はユニオニストの大多数が満足するような北アイルランドの独自性を提示しえず，「アイルランド自由国とは違う何か」を探し続けることになった。そして，ユニオニストの側からは，北アイルランド局によっていかなるイメージが提示されよう

とも，何らかの形で批判が生じることになったのである。

しかし，この問題のより根底にあったのは，自分たちが「他者」によって表象されていることに対する，ユニオニストのなかでも特に北アイルランドの独自性を強調する人びとの憤りであったと見ることもできる。北アイルランド局のスタッフのほとんどは北アイルランド出身ではなく，そのことは聴取者にも広く知られていた。そのため，彼らの描く「北アイルランド」は外側から見た自分たちの姿だという感覚が少なからぬユニオニストによって抱かれていたのである。たとえば，先に挙げた1933年のクリスマス番組に関する意見として，次のような投書が『ベルファスト・ニューズレター』に寄せられている（Belfast News-Letter 1934/1/1）。

> 「（BBCのスタッフの試みは誠実だとは思うが：引用者）」彼らは，我々が望んでいるものではなく，我々が望んでいると彼らが考えるものを与えている。…こうした（クリスマスの：引用者）放送は，我々に我々のあるがままを示すのではなく，おそらくはイングランドの大多数が考える我々の姿を示している。」

このような北アイルランド局に対する不満を背景として，ユニオニスト側では自分たち自身の手で放送を統制したいとする欲求が蓄積されていくことになる。そして，そのような欲求が最も顕在化するのが，同局の接収をめぐる論争であった。次節ではこの論争について考察を行い，ユニオニストたちが自分たちを表象するに際して抱えていた問題を異なる角度から検討していくことにしよう。

（3）北アイルランド局接収に関する論争

ここではまず，北アイルランド局接収をめぐる論争について考察する準備作用として，北アイルランド局とアイルランド自由国の２RNやラジオ・アスロンとの関係について論じておきたい。既に述べたように，２RNはアイルランド自由国の独立のシンボルとして誕生した。しかし，２RNの設立に際してはBBCから様々な援助が行われており，同国の放送局とBBCとの関係は第2次世界大戦後に至るまで良好なものであった（Gorham 1967: 19）。また，ベルファスト局も同局とのジョイント番組を放送する一方で，ダブリンの劇団であるアビー・シアター・カンパニー（Abby Theatre Company）の俳優をスタジオに招くなどしていた（Cathcart 1984: 40-41）。

しかし，前述のように，1930年代に入ると北アイルランド局と２RNやラジオ・アスロンとの協力関係に対する批判が高まっていくことになる[23]。アイルランド自由国に対する敵意が高まり，同国と北アイルランドとを可能な限り差異化し，分割を固定化しようとする動きが強まってきたからである。この点に関して，『ベルファスト・ニューズレター』に寄せられた次の投書は，明確にユニオニストの危機意識を反映していると言えるだろう（Belfast News-Letter 1931/5/6）。

> 「（アビー・シアター・カンパニーの俳優を使った：引用者）ベルファスト局からの放送は，イングランドやスコットランドで非常に浸透している次のような考えを助長してしまう。その考えとは，演劇でよく知られるような男女，つまりアイルランド人がアイルランド全土で暮らしているというものである。」

先に述べたように，アイルランド自由国は独立を果たした後も1949年までイギリス連邦に留まっていた。そのため，イギリス人の多くはアイルランド自由国と北アイルランド

とを明確に区別しておらず，この時期のイギリス連邦の地図にしても両者の制度的な相違が省略されることが多かった（Loughlin 1995: 101）。ここから，北アイルランド局と2RNやラジオ・アスロンとの協力は，そうした傾向をより一層強めるのではないかとの不安がユニオニストの間で生じるようになったのである。

そして，この北アイルランドとアイルランド自由国との差異化という点において，北アイルランド局に関するジレンマが最も明確に表れることになったのが，北アイルランド自治政府による同局の接収をめぐる議論であった。この議論は，1935年7月12日夜にオレンジ結社[24]のパレードによって生じた暴動に端を発する。この暴動ではプロテスタントとカトリックとが衝突した結果，死者をも出す事態へと繋がることになった。この暴動の発生原因については，ユニオニストの側がカトリックに責任を帰したのに対し，ナショナリストの側はプロテスタントによるカトリックへの襲撃と解釈した。そのような見解の相違があるなか，北アイルランド局は「暴動が発生した」という事実のみを報じ，その原因に立ち入ることはなかった（Cathcart 1984: 3）。他方，ラジオ・アスロンはナショナリスト側の解釈を伝え，北アイルランドのユニオニスト体制の批判を行った。そして，このようなアイルランド自由国の放送に対する反発から，自治政府は北アイルランド局を接収し，ラジオ・アスロンに対抗すべきだとの主張が行われるようになるのである。

翌1936年1月，ユニオニストの集会においてこの暴動に関する報道が問題とされ，集会の議長自らが北アイルランド自治政府は北アイルランド局を接収し，「対抗プロパガンダ」を行うべきとの主張を行った。また，北アイルランド局とラジオ・アスロンとの協力体制も批判され，「彼ら（北アイルランド局：引用者）は，唯一の目的がアイルランドを愛することではなくイングランドを憎悪することであるような連中と，何らの共有物も持つことができない」と論じられた（Northern Whig 1936/1/31）。

しかし，ユニオニスト側に立つ『ノーザン・ウィッグ』紙はこのような主張に対し，ラジオ・アスロンの「偏向」を認めつつも以下の理由から接収に反対する社説を掲載した（Northern Whig 1936/2/1）。その理由とは，まず第1にラジオ放送は主に娯楽のためのものであり，プロパガンダのためのメディアではないということ，そして第2にラジオ放送によるプロパガンダに対してイギリスの聴取者の多くは嫌悪感を抱いているということであった。これらの理由から，この社説は放送制度においてイギリスが「単一のユニット」であり続けることが望ましいと結論づけている。また，後日に掲載された投書でも，長期的に見れば接収は北アイルランド局のライセンス収入の低下をもたらすことが予想されるため，自治政府が必要な際に接収を行うため権限を有してさえすればよいとの見解が表明されている（Northern Whig 1936/2/4）。

これらの議論に反映されているのは，アイルランド自由国への「対抗プロパガンダ」の手段を欲しつつも，BBCというイギリス本土との「架け橋」を失うことを許容しえないというユニオニスト側のジレンマだと言いうる。北アイルランド自治政府による北アイルランド局の接収は，同局がBBCのネットワークから外れることのみならず，アイルランド自由国のそれと同様に政府によって直接運営される放送局となることを意味していた。従ってそれは，北アイルランドとアイルランド自由国との差異をより不明確にし，イギリス本土との紐帯を弱体化させるという点において選択しえない手段だったのである。

▶5　おわりに

本論はこれまで，戦間期の北アイルランドにおいてBBCのラジオ放送局がいかなる政治的・社会的文脈のなかに置かれてきたのかを論じてきた。そこでは，ナショナリスト

とユニオニストの双方が，それぞれの観点から見て「適切な」文化を発展させていくための資源としてラジオ放送局を考えていた。そこから，ナショナリストは北アイルランド局を「アイルランドのBBC」と見なすBBC本部に対して期待を寄せる一方，ユニオニストはアイルランド自由国と北アイルランドとの差異化を目指して同局の放送を批判し続けるという構図が生まれることになったのである。

そして，このようなユニオニストによる激しい批判の背景には，既に指摘したユニオニストの間での文化的アイデンティティに関する見解の相違があった。アイルランドの文化的多様性は南北の境界線によって区分されるような形では存在しておらず，したがってユニオニストが統合的な文化的アイデンティティを提示することは困難であった。言い換えれば，アイルランド自由国と北アイルランドとを差異化するためにユニオニストが用いることのできる文化的資源は極めて限られていたのである。しかし，互いを区別するための文化的資源が希少であるからこそ，その重要性を訴える声はより大きくなっていく。この点に関しては，イグナティエフの次の言葉が示唆的である（Ignatieff 1998=1999: 67）。「集団間の違いが攻撃的に表現されなくてはならないのは，まさしくそれが小さいからにほかならない。」BBC北アイルランド局の放送は，そのようにして増幅された文化的差異に関する主張のなかで，様々な批判の波にさらされることになったのである。

●注

1．マス・メディアと国民統合に関する理論的な研究については，津田（2000a，2000b，2003b）を参照のこと。
2．なお，北アイルランド紛争はしばしばカトリックとプロテスタントの紛争と捉えられ，カトリック＝ナショナリスト，プロテスタント＝ユニオニストという図式が用いられるが，後述のようにこの図式は必ずしも妥当ではない。
3．1924年にBBCは北アイルランドにベルファスト局を開設する。しかし，後述するように1934年に組織再編によってベルファスト局は北アイルランド局へと改組され，正式の「地域局（regional station）」となる。本論では煩雑さを防ぐため，同局の一般的な名称としては「北アイルランド局」の呼称を用いることにし，「ベルファスト局」の使用は1934年以前の同局に特化して言及する場合に限定する。
4．たとえば，佐藤（1998），津田（2003a）などが挙げられる。
5．他方，ナショナリスト内部でも南北アイルランド統一をどのように実現するのかをめぐって深刻な対立が存在した（Hennessey 1997: 70）。しかし，文化的アイデンティティという観点からすれば，ナショナリストの側には統一アイルランドという明確なヴィジョンがあった以上，見解の相違はそれほど大きくなかったのではないかと考えられる。
6．なお，本章で論じるアイルランド自由国および北アイルランドの社会状況については，堀越（1996），Craith（2002），Hennessey（1997），Loughlin（1995）などを主に参照した。
7．北アイルランドはしばしばアルスターと呼称されるが，それは必ずしも正確ではない。それは，アルスター地方にはアイルランド自由国の統治下にあった３県も含まれるからである。このような形での分割が行われた背景には，北アイルランドにおいてはプロテスタントが多数派となるよう，慎重な計算に基づいて自由国との境界が設定されたということがあった（Hennessey 1997: 5-6; Craith 2002: 9-10）。
8．そもそも，1914年に成立した第３次アイルランド自治法では，アイルランド全体に単一のユニットとして自治が付与されることになっていた。それに対してユニオニストは武装蜂起をも辞さない構えで反対し，北アイルランドに別個の自治政府が設けられることになったのである。しかし，北アイルランドで続発する紛争は，「寛容」や「ユーモア」を重要な要素とするイギリスのナショナル・アイデンティティとの不整合を生じさせ，北アイルランドが「外国」だという感覚をイギリス本土でより一層広めていくこととなった（Ignatieff 1993=1996: 317; Loughlin 1995: 99）。
9．このような立場の相違には，イギリスの一部であることから経済的な利益を得ている上流・中産階級と現在の体制から殆ど利益を得ていない労働者階級との対立が反映されていると言われる。
10．なお，この集中化政策とは，ロンドンのBBC本部と地域局とで類似した番組を制作するという無駄を省くため，番組の制作を可能な限り前者へと集中させることを目的とした政策であった（Briggs 1965: 295）。この政策を通じて，地域局に対する管理が強化され，反発が生じることになった。
11．Station Director（Belfast）to Director General（Head Office）1927/3/11, BBC WAC R13/366/1.
12．Director General（Head Office）to Station Director（Belfast）date unknown, BBC WAC R13/366/1.
13．こうしたBBC本部の態度の背景には，アイルランド自由国が独立を果たした後も1949年までイギリス連邦の一部に留まっていたということがあった（Scannell and Cardiff 1987: 165）。BBC本部は，アイルランド自由国が名目的にせよイギリス連邦の一部である以上，同国の文化をも放送に反映させる必要があると考えたのである。

14. 聖パトリックとは５世紀初頭から中頃にかけて，アイルランドでキリスト教の布教に努めた伝道者を指し，アイルランドの守護聖人と言われる（波多野 1994: 18）。３月17日はこの聖パトリックを称える日として，アイルランドの祝日とされている。
15. Northern Ireland Regional Director to Presentation Director（Head Office）1935/1/15, BBC WAC R34/239/2.
16. Programme Director（Northern Ireland）to Director of Overseas Services 1938/3/21, BBC WAC R34/239/3.
17. Northern Ireland Regional Director to Controller（Programme）1938/3/11, BBC WAC R34/239/3.
18. Report on Regions: Supplement on Northern Ireland 1936, BBC WAC R34/845.
19. また，このような放送にはBBCの地域放送政策に見られた田園志向（ruralism）が反映されていたと見ることも出来る。19世紀以降のイギリスでは，急速な産業化・都市化が進行する一方で「田舎の再発見」が行われ，失われつつある「伝統」に対する志向性が強まっていく。このような田園志向は戦間期において一層強まり（Stevenson 1984: 32），BBCの放送政策にも反映されていくことになる。すなわち，イギリス各地の田園生活を放送することで，安定した伝統的な「共同体」としてのイギリスを描き出す試みが行われることになったのである（Scannell and Cardiff 1987: 164）。
20. 'Ireland': A Programme for St. Patrick's Night, 1933, BBC WAC R34/239/1.
21. この論争については，以下の投書欄を参照（Belfast News-Letter 1933/3/20, 3/23, 3/24）。
22. この論争については，以下の投書欄を参照（Belfast News-Letter 1934/1/1, 1/2; Northern Whig 1933/12/27, 12/28, 12/30）。また，放送での方言の使用めぐる論争は，1935年にも『ノーザン・ウィッグ』紙上で行なわれている（Northern Whig 1935/10/28, 10/30, 11/1, 11/2, 11/6）。
23. これらの批判については，以下の投書欄を参照（Belfast News-Letter 1931/5/6, 5/7, 5/11, 5/16, 5/18, 5/19, 5/21）。ただし，この際にはアイルランドの俳優をベルファスト局が使うことに賛成する意見も寄せられ，読者の間での論争になっている。
24. 親イギリス的なプロテスタントの組織で，毎年７月12日に大規模なパレードを行う。このパレードがカトリックの居住地を通過する際，しばしば暴動が発生した。

●参 考 文 献

佐藤卓己（1998）『現代メディア史』岩波書店。
津田正太郎（2000a）「社会的コミュニケーション論から見た国民形成過程」（『マス・コミュニケーション研究』第57号）。
―――（2000b）「国民形成における『認識』の重要性」（『法学政治学論究』第46号）。
―――（2003a）「マス・メディアと国民統合」（『メディア・コミュニケーション』第53号）。
―――（2003b）「社会的コミュニケーションとナショナル・アイデンティティ」（鶴木眞編『コミュニケーションの政治学』慶應義塾大学出版会）。
波多野裕造（1994）『物語　アイルランドの歴史』中央公論新社。
堀越智（1996）『北アイルランド紛争の歴史』論創社。
Barth, F.（1969）'Introduction', in F. Barth（ed.）*Ethnic Group and Boundaries*, Oslo: Universitetsforlaget.
Beadle G.（1963）*Television*, London: Georglen & Unwin.
Briggs, A.（1965）*The Golden Age of Wireless*, Oxford: Oxford University Press.
Cardiff, D. and Scannell, P.（1987）'Broadcasting and national unity', in J. Curran, et al.（eds.）*Impacts and Influences*, London: Methuen.
―――（1991）*A Social History of British Broadcasting*, London: Blackwell.
Cathcart, R.（1984）*The Most Contrary Region*, Belfast: Blackstaff Press.
Connor, W.（1972）'Nation-building or nation-destroying？', *World Politics*, vol.24(3).
Craith, M.（2002）*Plural Identities - Singular Narratives*, Oxford: Berghahn.
―――（2003）*Culture and Identity Politics in Northern Ireland*, Hampshire: Palgrave Macmillan.
Gorham, M.（1967）*Forty Years of Irish Broadcasting*, Dublin: The Talbot Press for Radio Telefis Eireann.
Hennessey T.（1997）*A History of Northern Ireland 1920-1996*, Dublin: Gill and Macmillan.
Horgan, J.（2001）*Irish Media*, London: Routledge.
Ignatieff, M.（1993）*Blood and Belonging*, London: Vintage.（幸田敦子訳（1996）『民族はなぜ殺し合うのか』河出書房新社）。
―――（1998）*The Warrior's Honor*, London: Chatto and Windus.（真野明裕訳（1999）『仁義なき戦場』毎日新聞社）
Loughlin, J.（1995）*Ulster Unionism and British National Identity since 1885*, London: Pinter.
McLoone, M.（1991）'Inventions and re-imaginings', in M. McLoone（ed.）*Culture, Identity and Broadcasting in Ireland*, Belfast: Institute of Irish Studies.
―――（1996）'The construction of a partitionist mentality', in M. McLoone（ed.）*Broadcasting in a Divided Community*, Belfast: Institute of Irish Studies.
Pine, R.（2002）*2RN and the Origins of Irish Radio*, Dublin: Four Courts Press.
Stevenson, J.（1984）*British Society 1914-45*, London: Penguin.

【新聞】
Belfast News-Letter
Irish News
Northern Whig

【BBC関連資料】
BBC Handbook
その他，BBC関連資料に関しては，BBC Written Archives Centreの協力により入手した。

（津田正太郎　財団法人国際通信経済研究所研究員）